作文を孤独な作業にさせない

兵庫県神戸市立岩岡小学校研修委員会

本校は、平成十七年度より三年間、文部科学省「学力向上拠点形成事業」の指定を受け、「基礎・基本の定着を図る―書く力を高める指導法を求めて―」という研究主題を設定し、作文指導法を深める機会を得た。そして、十九年十一月二十七日、研究発表会（公開授業）を開いた。次は、参加者の感想である。

・作文をクラス全員で指導して進めることができることを学びました。

・作文を一人一人の孤独な作業にしない工夫の数々に感心しました。

・「もっと書きたい」「（授業）延長したらいいやん」という子どもたちの言葉に指導の成果を感じました。スキルを身につけることが自信につながり、作文を好きにさせているのだなと思いました。

評価する声をたくさん聞くことができたが、これから、わたしたちの基本的な考えと原則的な指導過程について述べたい。

一　基本的な考え

最も大切なこととして、「書くことを孤独な作業にさせてはならない」と、全職員で確認している。そして、そこから導かれた授業形態が一斉指導である。みんなの知恵を出し合いながら、構成計画から書き上げるまでの全過程を一緒に体験する中で、苦手な子どもたちも少しずつ書く作業の要領を得るようにしている。

また、上手な作文を書かせることよりも、書くことの抵抗感を取り除く指導を優先させている。それは、子どもたちだけでなく、教師自身も、「素晴らしい作文を」「光る表現を」という呪縛から解放されなければならないことを意味している。

書くことの抵抗感を取り除かせる最も有効な方法は、長い作文を体験させることである。何枚書けたかは、子どもたち自身にも一目で分かり、自信につながる。だから、発想を転換し、早い時期に一定量の作文を書かせたい。無謀なようだが、指導の工夫でそれが可能であることは、本校の一部で既に試みた実践例があったので、案外早く教師集団の共通認識になった。

二　原則的な指導過程

職員研修を積み上げ、原則的な指導過程を次のように設定し、実践を進めている。

(1)　構成計画を立てさせる

課題に対してどのような内容にするかみんなで討論し、共通の計画を立てさせる。次の例は、三年生四月に書かせたものである。

［題］わたし（ぼく）

①すきなべんきょう　②すきなあそび

③すきな本　④すきなテレビ

⑤すきな食べもの　⑥すきなどうぶつ

⑦とくいなこと　⑧自分のいいところ

⑨自分のなおしたいところ

原則として一つの項目が一段落になるの

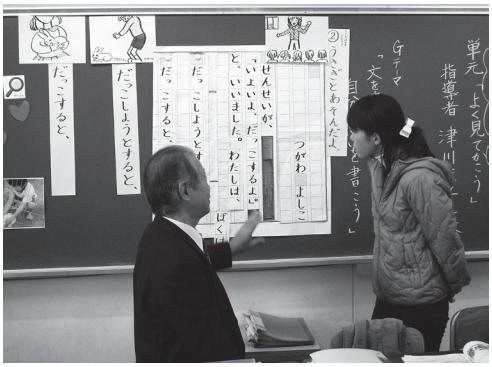
で、この場合は九段落の作文を書くことになる。段落の多い分、それまで一～二枚しか書けなかった子も、ちょっと頑張れば、三～四枚以上の作文が可能になる。段落があるので、整理された、読みやすい文章になりやすい。

⑵　構成計画に従って作文用紙に書かせる

①題名・氏名を書かせる

必要のない迷いを招かないための約束事として、例えば、長い題名は上の二マス、短い題名は三マス空けさせるようにする。そのマスを黄色の色鉛筆で塗らせる。

二行目の下方に氏名を書かせる。例えば、名字と名前の間、名前の後を一マス空けさせ、黄色に塗らせる。



②段落の初めの一マスを空け黄色に塗らせる

一斉に塗らせ、みんなを同じスタートに立たせる。クラス全体に一体感をもたせ、苦手な子どもたちも引き込む。

③一つの構成部分（段落）を書かせる

苦手な子どもたちを置き去りにしないよう、次のような手立てを講じながら進める。

・書き始められない子のために、出だしの言葉や文（リード文）を例示する。

・書き進めやすくするため、ヒントとして、「先生ならこう書く」というような「例えば作文（口頭作文）」として、作文形式の語りを入れる。

・「この子は、こんなことを書いているよ」「これは面白い」などと、好ましい情報を伝え続ける。

・会話文を入れると文章が生き生きしてくることがあるので勧める。会話文を入れて改行することによって生じた空白マスを黄緑色の色鉛筆で塗らせる。段落の黄や、会話文の黄緑の色塗りによって、作文用紙には意味のない空白はないことを教える。

・早く書き終わった子から指名して読ませ、まだ書き続けている子の参考にさせる。聞きながら書くことを認め（勧め）、作業をストップさせない。

・発表が終わったら、推敲や校正をさせる。

・一定の時間がたったら、「そろそろ終わりましょう。今書いている文までです。あまり書けなかった人は、次の段落でたくさん書くようにがんばりましょう」と声をかけて終わらせる。時間を切ることによって、緊張感が生じ、一定のスピードで書く力を育てる。「次の項目（段落）では、もっと書くぞ」という意欲をもたせることが大前提。

④段落の残りのマスを黄色に塗らせる

原則として、これが全員できてから次の落楽を書かせる。一斉指導の大原則である。

②～④の作業を繰り返し、最後の項目（段落）まで書かせていく。

⑶　全体の推敲・校正と読み合いをさせる

個人の推敲・校正が終わってから、子どもたちどうしで読み合いをさせ、間違いや分かりにくいところを指摘し合うようにさせる。

だが、その子独自の個性的な優れた表現を変更させられる場合があるので注意する。特に、成績上位の子が下位の子に指摘した場合。

こうべしりついわおかしょうがっこう　「岩岡小学校作文指導の全体像」について、資料をホームページに掲載しています。（URL＝http://www.kobe-c.ed.jp/iwo-es/）